

目的 本研究は家庭科の住居を中心とする領域の教材づくりを目指す基礎的な調査研究である。先に報告したように中学生段階で個人的生活領域への関心が急激に高まることをふまえ、中学生の個人的生活領域の物的条件とそこの住み方について、地域別、男女別、発達段階別に検討した。

方法 調査対象として、山口県下の①旧くからの住宅地、山口市内中心部のB中（旧住宅地Bと略す）②商工混合地域、徳山駅周辺のC中（商工業地区と略す）③瀬戸内海に浮かぶ大島のD中（農漁村地区と略す）の1～3年男女生徒各々40名を選定した。調査は各中学校を通して調査票を配布・回収した。配票数613、回収数553、回収率は92%である。

結果 1) 専用子ども室の確保は地域差より性差が明白であり、男子は女子より優先されている。また、これを親や老人の専用寝室の確保と比較すると、いづれの地域においても、1位老人、2位中・男子、3位中・女子、4位親(夫婦)である。2) 子ども室の家具としては、地域にかかわらずまず"勉強にかかわる机、本棚"があげられ、続いて衣類の収納家具、ベッド、そして趣味的な家具の順である。趣味的家具(ピアノ、ステレオ)の所有については性差、学年差が明らかである。3) 子ども室での生活は地域にかかわらず勉強、就寝が中心である。また、7割は友人の接待も行う。しかし、部屋のうちじまでやる者は特に男子で少く半数程である。ただし、これは男女とも農漁村地区では他地区より高い。4) 単独就寝は学年が上がるにつれて増加する。同室就寝者は同性の兄弟以外に農漁村地区の特に女子で両親、祖父母等が多くみられる。